

表現の類比(二)

——見ることにについて (プラトン『テアイテトス』一八四B—一八六E)⁽¹⁾

岡 部 勉

「見ることは何か」という問いは、心理学者のものでも文法学者のものでもない。私はここで、見ることを、判断すること、知ること等から区別したいと考えている。しかしこのことは、私が心理学者や文法学者に対して議論しなければならぬ、ということの意味するものではない。

見ることが、判断することや知ることと別であるということは、自明の事柄であって、問うまでもないことである、と思われるかも知れない。だが、見ることを説明しようとして、(1) 或る人々(第一の人々)はそれを、觀念を抱くこと、思惟すること、判断すること、推量すること、或は比較すること、対照すること、区別すること等であるとする。⁽²⁾ 他方、(2) こうしたこと一切を、見ることから排除しようとする人々(第二の人々)もある。この人々の場合、見ることに残される唯一のものは、言わばものとの盲目の出会いのようなものでしかない。それというのも、何と出会ったかという問題は、既に見ることの領分を超えているというのがこの人々の考え方だからである。⁽³⁾ 更に、(3) それらが判断すること等であるかどうかは別として、見ることに知ることとは同じであると主張する人々(第三の人々)もある。そのように主張する人々のうちの或る人々(プロタゴラス主義者)は、すべてが思うことではないとする。彼らによれば、私が、

表現の類比(二)

今、立方体を見ているという場合でも、或は私が、ユークリッド幾何学に於て三角形の内角の和は二直角であると知っているという場合でも、どちらも同じように、単に私がそう思っているということではないのである。また別の人々（ヘラクレイトス主義者）は、すべてがなる、ということではないとする。それ故、「私の見たそれは立方体である」と言っているのではないし、「三角形の内角の和は二直角である」と言ってもならない。この場合、正確にはどのように言うべきであるにせよ、彼らによれば、そのどちらについても、とにかく同じように言わなければならないのである。

ここで私が議論しなければならないのは、以上の三種類の主張をなす人々に対してである。見ることと、判断することや知ることとの間の区別は、少しも自明ではない。そこで、私は先ず、それらの間に全く何の区別もないと主張する第三の人々に対して、区別があるということと、とりわけ見ることと知ることとの間には明確な区別があるということとを、論証することにしたい（二参照）。この論証に際しては、われわれはプラトン（『テアイテトス』一八四B—一八六E）の議論を参照することが出来る。何故なら、その議論は、正に、見ることと知ることとは同じであると主張に対して、見ることが知ることではない（二つは区別される）ということとを、最終的に明らかにするはずの議論だからである。

ところで、その論証はどのようにしてなされれば良いのか。このことに關して、少くとも次のことだけは明らかである。即ち、彼らの主張（感覺することと知ることは同じであるという主張）が彼ら自身の主張する仕方（プロタゴラス説とヘラクレイトス説）によっては根拠付けられ得ないということが明らかにされたとしても、唯それだけでは、その論証（二つは同じでないということの論証）は少しもなされたことにはならない、ということである。——例えばプロタゴラス説については、次のようにしてそれを論駁することが出来る。プロタゴラス主義者は、或る人が或ることについて何か或ることを思ったという場合、その人がそのことについてそう思ったならば、そのことはその人にとってそうである（真である）、と主張する（そして、この点では、感覺することと知ることとの間に何の違いもないとする）。言い換えれば、彼らは、「そう思う」ことが「そうである」ことの必要十分条件である、と主張するのである。即ち、彼らの主張（M）

は、すべての人にとって「そう思うことはそうであることの必要十分条件である(p)」は真である(M)、ということである(M は M の十全な解釈である)。ところで、今、或る人(S)が「 p でない、即ち、必要条件でもなく($\neg p$)、十分条件でもない($\neg p$)」と思ったとしよう。すると M によって、 S にとっては「 p でない、即ち、 p_1 であり且つ $\neg p_2$ である」が真である(M_s)、ということになる。それ故、 S にとっては p は偽である(M'_s)。 M'_s は M に反する。従って、 M は自己自身を論駁することになる。⁽⁶⁾ — 以上のようにして、彼らの主張が退けられたとしよう。しかし、このことによって直ちに、感覚することと知ることとは同じであるとする主張そのものが退けられたことにはならない。それによって明らかにされたのは、単に、その同じであるとする主張を、「そう思う」ことが「そうである」ことの必要十分条件であるとすることによって、決して根拠付けることが出来ないということだけである。だが、それによって、同じでないということが何らかの少しでも証明されたということはない。 — この点はヘラクレイトス説の論駁(一八—B—一八—C)についても同様である。ヘラクレイトス説の場合は、仮にその説に従って「一切は生成変化する(場所に於ても性質に於ても)」とすると、何についても「そうであってそうでない(より正確には、そうと言ってはならないし、あると言うことも許されない)」ということが帰結するだけである。それ故、感覚することと知ることとは同じであるのでもないし、同じでないのでもない。少くとも、それによって同じであるということ、また同じでないということも、証明することは出来ない。⁽⁷⁾

では、同じでないということの証明はどのようにしてなされれば良いのか。 — それがどのようにしてなされるのである、少くともそれは、単に、同じであるということがあれやこれの主張する仕方によっては証明出来ない、ということが明らかにされるだけではなされ得ないのであるから(このことは既に明白である)、それとは別の仕方ではなされねばならない。問題は、その別の仕方が、「見ることは何か」に関わる何らか積極的な主張を含むことになるのかどうか、言い換えれば『テアイテトス』一八—B—一八—Eの議論は、「見ることは何か」についてのプラトン自身の積極的な主張

表現の類比(二)

を含むのかどうか、そしてもし含むという場合には、その主張は先の第一の人々のそれと一致するものであるのか、それとも第二の人々のそれと一致するものであるのか、或は全く別の考え方を要求するものであるのか（私にはそう思われる）、そしてそれはどのような考え方であるのか、を確かめることである（三参照）。——その結果われわれは、知ることに対して、つまり知ることとの違いに於てある、見ることの何であるかを明らかにすることが出来よう。

ところで、一般に、聞くことと見ることは同じ種類の事柄とされる（仮にこの点に何らかの問題があるとしても、ここではそれについては問わない）。それに対して、同じく一般に、話すことと見ることは別の種類の事柄とされる。そしてこれら二つがそのように区別されるということは、これも亦、自明のこととされる。しかし、その点に問題はないのか。とりわけ知ることに対してこれら二つを置くとき、それら二つについてわれわれはどのように考えるべきであるのか。最後に、私はこの点に若干言及したい（四参照）。

二

見ることと知ることとは同じであると主張する人々に対して、どのようにしてプラトンは同じでないということを論証するのか。先に述べたように、この点を先ず見定めることにしたい。ところで、われわれはプラトンの議論を大きく二つに分けることが出来る。即ち、前半一八四B—一八五E——私はそれを、相異なる二つの問いに應じて、更に二つに分ける（その各々は二一と二二に於て考察される）——と後半一八六A—E（二二三に於て考察される）とである。

（二一）さて、プラトンはその議論を次のような問いを提起することからはじめる。即ち、「人は何によつて（何）見たり聞いたりするのか」という問いである（一八四B）。そしてそれについては、「われわれは同じもの（仮にそれをΨ

と名付けよう) によって見たり聞いたり触れたりするのである」ということを確かめるためである、と後に (二八四 D) 説明される。⁽¹⁰⁾ しかし、何故このことがはじめに確かめられねばならないのか。そして、本当のところ、これによって一体何が確かめられることになるのか。言い換えれば、「何によって見るのか」という問いは、そもそも何を問おうとするのか。更に、この問いに対して「別々のものによって (即ち、目によって見、耳によって聞き、手によって触れる等)」と答えることは、一体どのような困難を生じさせることになるのか。⁽¹¹⁾

私は、以上について明らかにするために、次のような例を考察することからはじめることにしたい。——今、私が或るものを手にしているとしよう。そして、私は私の手が球に触れていると感じたとする。だが、次にふとそれに目をやると、意外にもそれは立方体であったとしよう。私はこのことに驚くであろうし、また、本当に立方体であるのかどうかも一度見直して確かめようとするであろう。そして、もし本当に立方体であるとすれば、最初に触れたときにどうして球と間違えたのか、不思議に思うであろう。⁽¹²⁾ このように極端な例は極く稀にしかないかも知れない。しかし、あり得ないという訳ではない (そしてそれで十分である)。むしろ問題は、私が球ではなくて立方体を見たときに、意外に感じたり、驚いたり、確かめようとしたり、或は、本当に立方体であると知って、不思議に思ったりするというそのことである。

何故私はそうしたことを経験することが出来るのか。それは、私が私の触れたものと私の見たものとが同じ一つのものであるということを何らかの仕方で捉えることが出来るから、或は少くとも、単に「球に触れる、或は立方体を見る」というだけでなく、何かそれ以上のこと、つまりそれが同じ一つのものであるのか、それとも別の二つのものであるのか、そしてそれは立方体であるのか球であるのか、それとも (二つであって) 両方であるのかといったことを、私が問題にすることが出来るからではないか。——これに対して、仮に私がそういったこと一切を問題にすることが出来ないとしたら、つまり単に「球に触れる、或は立方体を見る」というだけであるとしたら、球に触れた後で立方体を見たとしても私は決して驚いたりしないであろう。その場合には、私は一方で球に触れ、他方で立方体を見たという唯それだけのこと

表現の類比(二)

でしかないからである。仮にもう一度触れ直して、今度は立方体を感じたとしても、それが先に見た立方体と同じ一つのものであるのかどうか、或は今度触れたものが先に球と感じたそのものであるのかどうか問題になり得ないのであるから、要するに今度は立方体を感じたという唯それだけのことでしかない。言い換えれば、私が手によつて球と感じたその限りに於てそれは球となり、立方体と感じたその限りに於ては立方体となり、また目によつて立方体と見たその限りに於てそれは立方体となるのである。従つて、それは球でもあり立方体でもある。また逆に、立方体でもなく球でもない。それ故、それが何であるかということも問題となり得ないのである。⁽¹³⁾——ところで、私であれ誰であれ、或は他の何とされるのであれ、同じものが見たり触れたりするのだとしてみても、そのことはここに生じた困難に対して何の関わりもないことである。例えば、この同じ私が一方で球に触れ、他方で立方体を見たとしても、そして仮にそれらのことが同時に生じたとしても、そのことに私は少しも驚かないであらう。また、仮に私がそのときその手を見ているとしても、事態は少しも変らない。何故なら、この同じ私が見て触れるのであるということによつては、私の触れたものが私の見たそれであるというそのことは何ら保証されないし、それどころか、そうしたことが問題になるということの可能性すら開かれることはないからである。⁽¹⁴⁾

この球と立方体とに関する例はプラトン自身のものではない。しかし私は、このような例を考察することによつてプラトンが最初に出した問い、即ち「人は何によつて見たり聞いたりするのか」という問いが、一体何を問おうとするものであるかを明らかにすることが出来ると考える。先に私は、私の例に於て、一方で球に触れたと感じ他方で立方体を見たという場合に、何故私は驚いたりするのかということが問題であるとした。何故私は驚いたのか。この問いに正確に答えることは、プラトンの「人は何によつて見たり聞いたりするのか」という問いの意味を正しく捉えることになるであらう。私が驚いたのは、同じものが球であつて立方体であるということとを、二つの感覚が私に告げたからである。言い換えれば、それは、私の見たものと私の触れたものとが同じ一つのものであるということとを、何かによつて私が捉えていたか

ら、或は少くとも何かによって同じ一つのものであると思うことが出来たからである。そして、もしその場合に私が驚かなかつたとしたら、それは、私が球と立方体との二つの別のものであるということをやはりその何かによって捉えることが出来た（そう思うことが出来た）からである。それだけではない。更に、球であつて立方体であるということに私が驚いたり、一方は球であつて他方は立方体であるということに驚かなかつたりするのは、これもその何かによってそれが立方体である、ということ（場合によっては、立方体でない、ということ）を、或は球である、ということ（球でない、ということ）を捉えることが出来る（そう思うことが出来る）からである。その何かによって、私はそれが一つなのかそれとも二つなのか、同じなのかそれとも別なのか、またそれは何であるのか、立方体であるのか球であるのか、それとも両方であるのかといったことを捉えることを出来る（そう思うことが出来る）のでなければならぬ。先にわれわれは、その何かを Ψ と名付けて置いた。それによつて、人は見たり聞いたり触れたりするのである。——この場合の「によつて」が何を意味するかは明白であらう。それは、 Ψ が見るということでも、 Ψ が見るということそれ自体を成立させるということでもない。先の例に於て、言わば Ψ を取り除いて「同じものによつて」ではなく「別々のものによつて」見たり触れたりするとした場合でも、見る、或は触れるというそのこと自体が不可能になるということはないからである。しかし Ψ がないとするならば、私の見たものが私の触れたものと別のものであるのかそれとも同じものであるのか、二つであるのかそれとも一つであるのか、立方体であるのかそれとも球であるのか、或は両方であるのかといったことを、そもそも問題にすることすら出来なくなるのである。言い換えれば、もし Ψ がないとすると、私はそれ（この同じ一つの立方体）を見たとしても、それ（あの同じ一つの球）に触れたとすることも出来なくなるのである。同じかどうか、一つかどうか、何であるかといったことが問題にすらなり得ないところでは、何を見、何に触れたかということも問題となり得ないであらう。これと逆に、 Ψ によつてはじめて私はそれを見たとすることも、それに触れたとすることも出来るようになるのである。それ故、「によつて」が規定しようとしているのは、むしろ何を見、何に触れたのかという問題、要するにそれの

表現の類比(二)

「何であるか」という問題に関わる事柄なのである。⁽¹⁷⁾そしてそれだからこそ、「何によって見たたり聞いたりのか」という問いは、感覺することと知ることの区別についての議論の最初に提起されねばならなかったのである。前半の残りの議論についての考察によって、このことはより一層確証されるであらう。

(二—二) さて、先回りして言えば、プラトンが前半の残りの議論の結論としてわれわれに承認させようとするのは、次のようなこと、即ち「アそれ自身を通して、調べられるものと目や耳を通して、調べられるものとがある」ということである(一八五E)。⁽¹⁸⁾前者に属するのは、あるとかない、同じとか異なる、一つとか二つ、或は似ているとか似ていない、美しいとか醜い、善いとか悪いといったことであり、プラトンはこれらを「共通のもの(*τὰ κοινά*)」と呼んでそう規定する。⁽¹⁹⁾それに対して後者に属するのは、赤いとか白い、(音の)高いとか低い、柔いとか固い、甘いとか辛いといったことである。これらは或る特定の感覺を通してのみ捉えられるものである。その意味は、例えば赤い色は目を通して見ることが出来るが耳を通して聞くことは出来ない、逆に高い音は耳を通して聞くことは出来るが目を通して見ることは出来ない、ということである。⁽²⁰⁾——われわれはここで、プラトンの前半の残りの議論の最初のところに立ち帰って、そこでのプラトンの問いを自ら問い直すことにしよう。その際われわれが予め認めて置かなければならないのは、「共通のもの」とそうでないもののとの区別ということだけである。後者は、文字通りの意味に於て、目を通して見ることの出来るもの、耳を通して聞くことの出来るもの、手を通して触れることの出来るもの等であった。では、それに対する「共通のもの」とは見ることも聞くことも触れることも出来るものであるのか。それとも、プラトンの結論が示唆するように、逆に見ることも聞くことも触れることも出来ないものであるのか。要するに「それは何を通して(*διὰ τί*)捉えられるのか」(一八五B)、これがここでのプラトンの問いである。——この問いによって何が問われようとしているかは既に明白である。それは、厳密な意味に於て人は何を感じることが出来て、何を感じることが出来ないかを明らかにしようとする

ものである。言い換えれば、見えるもの（感覚を通して捉えられるもの）と見えないもの（感覚を通しては捉えられないもの）とを、厳密に区別しようとするものなのである。このことは当然問われなければならない。われわれは先のところ（二一）に於て、例えば私の触れたものが私の見たものと同じ一つのものであるかどうかといったことを、手や目によってではなくて、 Ψ によって捉えるのであるとした。言い換えれば、その Ψ によって私はそれ（同じ一つのその立方体や同じ一人のその人）を見るのであった。それを別のものや別の人と錯覚することもあるかも知れない。しかし、それを錯覚とし、そして訂正することもやはり可能である。では、そのようにして私は同じ一つのその立方体を見るのだとすると、それは、私が同じということを、或は一つということを、そしてまた立方体である、ということそのことをも見る事が出来るということなのであるうか。

これに対してプラトンはどのような議論を提出するのか。—— 先ずはじめにプラトンは、感覚されるものは或る感覚を通しては感覚されるが別の或る感覚を通しては感覚されないということを確認する（一八四E—一八五A）。今、相異なる感覚を通してのみ感覚されるものAとB（例えば、この或る色とこの或る音）があるとしよう。そして、それらについてそれらに共通のことC（それは先に挙げた「共通のもの」のうちのどれか一つでも良いが、それだけでなく、どんなことであれそれらについてそれらに共通に考えられることでありさえすればそれで良い）を考えたとして。問題は、何を通してそのCを調べる事が出来るのか、言い換えれば、何を通してそれらがCかどうかを調べる事が出来るのかということである（一八五A—B⁽²¹⁾）。これは実際にはあり得ないことであるが（とプラトン自身断っている）、仮にCが辛いということであれば、それは舌を通して調べる事が出来よう（一八五B—C）。—— 何故あり得ないことであるのか。それは、単に、或る色が辛いとか或る音が辛いといったことが、経験的にないからではない。⁽²²⁾むしろそれは、原理的に、AとBが各々相異なる感覚を通してのみ感覚されるものである場合、それらについてそれらに共通のCを感覚することが出来るような、そういう感覚というものはあり得ないからである。⁽²³⁾ 仮定によって、AとBを共に感覚することの出来るような

表現の類比(二)

感覚はない。だが、仮にCが感覚することの出来るものとする、AとCを共に感覚することの出来る感覚、或はBとCを共に感覚することの出来る感覚はあるかも知れない。しかし、AとBとCのすべてを感覚することの出来るような一つの感覚はあり得ない。それ故、Cを感覚することの出来る感覚C'を通しては、AとBが共にCかどうかを調べることは出来ない。C'を通しては、必ずAかBのどちらか一方を感覚することが出来ないからである。——Cが感覚することの出来ないものであることを言うには、以上で既に十分である。しかし(と人は反論するかも知れない)、何故C'を通してAとBが共に感覚されるのでなければならぬのか。A'を通してAを感覚しB'を通してBを感覚し、そしてC'を通してCを感覚する(C'はA'またはB'と同じかも知れないし、或は別かも知れない)としてはならない理由は何か。これに対しては、次のように言うことが出来る。即ち、相異なる感覚を通してのみ感覚されるAとBについてそれらに共通のCを感覚するということが問題である以上、それはやはり、原理的に不可能である。何故なら、例えばA'を通して感覚されたAについてC'を通してCを感覚するということは、実はA'とC'、AとCの各々が同じものである場合を除いては、絶対にあり得ないからである。それを逆にあり得るとすることは、同じものがA'を通してはA(この或る色)として感覚され、C'を通してはC(この或る味)として感覚されるところのようなものである。これは、言う迄もなく、AとCが同じものであって同時に別のものであるとすることである。Cは感覚され得るとした場合、われわれはこのような結果になることを避けることが出来ないであろう。

以上によって、「共通のもの」は感覚され得ない、それ故それは感覚を通して調べることの出来ないものである、ということが明らかとなった。では何を通して調べれば良いのか。これについては、次のことだけは既に明らかである。即ち、それが何であれ、それを通してCが捉えられるのでなければならぬのであるが、その場合、AはAとしてまたBはBとして捉えられ、その上でそれらについてそれらに共通のCが捉えられるのでなければならぬということである。もしAが赤いということであるとすれば、先ずそれがこの赤として捉えられ、その上でそれについてCが、例えばその美

しいということが、捉えられるのでなければならぬのである。これは、先の場合と違つて、AとCが同じものであつて同時に別のものであるとすることではない。先の場合には、仮定によつてCは感覺されるものであったから、Cを感覺することの出来る感覺Cを通して、Aを通して感覺されたAについてCを感覺するということは、AとC及びAとCが各々同じものである場合を除いては不可能なのであつた。それに対して、先ずAと感覺されたものをそれとして捉えた上で、それについてCを捉える、これは取りも直さず「AはCである」と捉えることなのであるが、この場合には「AとCは同じである」ということにはならない。何故なら、「AはCである」とは、決して「AとCは同じである」ということではないのであつて、むしろ逆に、それは「AとCとは別のものである」ということを、即ち「AはCでない」ということを何らか含むのでなければならぬからである。ところで、一般に「xはFである」ということが捉えられるとすれば、それはψによつてでなければならぬのであつた（——参照）。それ故、AについてCを捉えるということも、ψによつてでなければ不可能である。われわれは（何を通してかは別としても）ψによつてCかどうかを調べるのである。そしてもし、それを通して「共通のもの」を捉えることの出来るようなものとしては、今その可能性が原理的に否定された感覺以外に選ぶ余地がないとすれば、結局のところわれわれは、他の何ものをも通さず、唯ψそれ自身を通してのみそうしたものを捉えるのであるとしなければならぬのは必然である。⁽²⁸⁾

これまでの考察によつて次の二つのことが明らかに became。即ち、感覺されるものとされ得ないものとがある（両者は厳密に區別される）ということ、そして、感覺されるものは感覺を通して捉えられるが、感覺され得ないものである「共通のもの」はψそれ自身を通して捉えられるということである。これら二つのことは、感覺することと知ることの區別にとつてどのような意味を持ち得るのか。感覺され得ないものがあるということは、それだけで既に感覺することと知ることが同じでないということを、部分的には指示しているかに思われよう。⁽²⁹⁾ われわれは確かに「共通のもの」は感覺され

表現の類比(二)

得ないものであるとした。しかし、感覺され得ないものがあるということは、どんな意味に於ても、直ちに感覺することと知ることとは同じでないということに結びつきはしない。われわれは、感覺され得ないとされたその「共通のもの」が知ることの出来るものであるかどうかについては、今のところ何も知らない（それは Ψ によって Ψ それ自身を通して捉えられるとしたが、これが知ることとどう関わるのかについては未だ何も知らない）からである。それ故、これまでの考察の限りでは、感覺することと知ることの違いについてわれわれは何も知らないのである。——だが、もし知ることについて、それは「共通のもの」のうちのどれか一つ（それで十分である）を捉えることを少くとも必要条件とする、ということが明らかにされるならば、そのときには感覺することと知ることとは同じであると主張し続けることがもはや許されなくなるであろう。そして、そのとき同時に、われわれは、十全の意味に於て、知ることを感覺することから区別することが出来るようになるであろう。

(二—三) さて、知ることは感覺することではないということを経済的に論証しようとするプラトンの後半の議論は、次のような問いによってはじめられる。即ち、「あるということ(*ousia*)」は Ψ によって Ψ それ自身を通して捉えられる、とすべきであるのかどうかという問いによってである（一八六 A）。そして、それについては直ちに「最もあらゆるものに共通のものである (*hólōta eni pántōn káthēnetai*)」とされる。それ故、このことを認めるのである限り、そしてまたわれわれの二—二に於ける考察に従うのである限り、それは Ψ によって Ψ それ自身を通して捉えられるとしない（同上）。

しかし、その「あるということ」とはどのようなことであるのか。これについて、われわれのこれまでの考察は、次のように考えるべきであることを示唆している。——二—一の私の例に於て、例えば私が手を通しては球を感じ目を通しては立方体を見たという場合、われわれが二—一及び二—二の考察によって確認したところに従うならば、それが同じ

一つのものである、かどうか、そしてまたそれは球であるかそれとも立方体であるかといったことは、 Ψ によって Ψ が自身を通して調べられねばならないのであった。私が球を感じたのは手を通してであり、立方体を見たのは目を通してである。しかしそのことと、それが球であるというそのこと、或は立方体であるというそのこととは別である。プラトン自身の挙げている例（二八六B）に則して繰り返して言えば、或る固いものの固さや或る柔いものの柔さを感じるのは手を通してである。だが、一方は固いものである、というそのこと、他方は柔いものである、というそのこと、そしてこの場合には二つのものである、というそのこと、更にはこれら二つは反対のものである、というそのこと等を捉えるのは、 Ψ によって Ψ が自身を通してである。——それ故、「あるというそのこと」とは、例えば「これは立方体である」に於けるそのある、ということである。

ところで、以上の考察からすると、目を通して立方体を捉えるということと、 Ψ が自身を通してそれが立方体である、ということとを捉えることは区別されねばならないのであった。このことは恐らく奇妙なことと思われよう。何故なら、私が一方で手を通して球を感じ他方で目を通して立方体を見たというような場合、普通はもう一度良く見直すか触れ直すかすれば、それが球であるか立方体であるかを調べる事が出来るであろうからである。これ以外にそしてこれ以上に、簡単でしかも確実な方法はあるまい。すると、目を通して、或は手を通してそれが球であるかどうか、立方体であるかどうか等を調べる事が出来るとすべきなのであろうか。それにまた、目を使うことも手を使うこともせず、それがどのようなものであれ単に Ψ だけを使って、それが球であるかどうか、立方体であるかどうか等を調べる事が出来るようか。——しかし、何度目を通して立方体を見ようと、また何度手を通して球を感じようと、唯それだけではそれが立方体である、或はそれが球である、ということにはならない。感覺することによっては、決して「共通のもの」である「ある」というそのこと」を捉える事が出来ないからである。

プラトンの、感覺することと知ることとは同じでないということについての論証の、最後の部分は極めて簡潔である。

表現の類比(二)

それは、今確認したばかりの、感覚することによっては「あるということ」を捉えることは出来ないということを使つてなされる。即ち、それが何であれ或るものについて「あるということ」を捉えてそのことに達する (true) ことがないのであれば、それについて「真のこと (ἀληθεια)」に達したとすることは出来ない。ところで、それについて「真のこと」に達していない (それについて「真のこと」を捉えていない) のであれば、それについて知っているとすることは出来ない (一八六C)²⁸。しかし感覚することは、「あるということ」を、従つて「真のこと」を捉えることがあり得ない。他方知ることは、「真のこと」を、従つて「あるということ」を捉えるのでなければ、決して知ることがあり得ない。両者の違い (discrepancy) は明白である (一八六D)。それ故、二つを同じであるとすることは出来ない。感覚することと知ることとが区別されるべきであるということは、以上によって明白である (一八六E)。

この最後の論証は、既に明らかのように、先に述べた、知ることが「共通のもの」の一つである「あるということ」を捉えることを必要条件とする、ということに基づいている。そして、この論証はそのことがなければ成立し得ないのである。²⁹しかし、知ることの何であるかがそれによって十分定義され尽したのでないことは言う迄もないであろう。知ることが「あるということ」を捉えるということによって定義されるとしても、「あるということ」を捉えるという正にそのことが何によって成立するかは、少しも明らかではない。それは、例えば「これは立方体である」と思ひなす (believen) ことによって成立するのである³⁰か。——だが、われわれはこの問題にこれ以上立ち入る必要はない。われわれにとっては、知ることが最終的に何によって成立するのであれ、とにかくそれは感覚することから厳密に区別されねばならない、ということが明らかになれば、それで十分である。ここでわれわれが次にしなければならないのは、見ることは何か」に関して、以上の考察は何をもたらし得るかを明らかにすることである。

(三一) それについて私は、先ず最初に、私が一のはじめのところと言及した第一の人々と第二の人々に対して議論する必要があると考える。第一の人々は、恰も見る事が出来るためには単に見るということだけでは不十分であつて、それだけでは何も見る事が出来ないかの様に、見ることに他の多くのことを絡みつかせるのであつた。つまり彼らはそれを、観念を抱くこと、思惟すること、判断すること、推量すること、或は比較すること、対照すること、区別すること等であるとするのであつた。これに對して第二の人々は、そうした多くのことであるとすることについては言う迄もなく、言わば單に「見る」と言うことについてすら、それを言い過ぎであると考えるのであつた。この人々にとつては、例えば赤を見るという言い方は既に正確なのであつて、正確には、何か或るものを見てその結果、赤の観念を抱いた、とでも言うべきなのである。——これら二つの主張は、見ての通り、互いに相容れないものである。二つを調停することは出来そうもない。それにしても、何故、各々の主張はこのように相反する結果になるのであろうか。

第一の人々についてわれわれは、『屈折光学』に於けるデカルトをその代表者とする事が出来よう。デカルトが見る事について考へるときのモデルは、例えばわれわれが銅版画を前にしているようなそういう場合である。そこにはインクのしみだけがある。しかし、われわれはそこに、それとは少しも似ていない森や街や嵐を見ることが出来る。何故、そうしたものを見ることが出来るのか。それは、そこに森や街や嵐があるからではない。むしろそれは、デカルトによれば、盲人が杖を頼りにその杖を通して送られて来る信号を解読することによつて、言わば「手でもものを見る」ように、丁度そのようにわれわれは目でもものを見るのだからである。このことは色の場合でも、基本的には變りがない。デカルトによれば、色の感覺は脳の内部に生じた運動の或る一定のあり方である。しかし、例えば赤を見るとは、要するに赤の観念

表現の類比(二)

を抱くことであり、脳の運動はその観念を呼び起こすための、単なる機会原因でしかないのである。⁽³³⁾それ故、脳の運動そのものが色の感覚であるのではないのであって、単に私の脳の内部に或る運動が生じたというだけでは、それがどのような運動であれ、それは決して私に何の感覚も生じさせないのである。私に何か或る感覚が生じたとすれば、それは私が何か或る観念を思い浮べたときである。従って、私が何の観念も抱かなければ、たとえどのような運動が私の脳の内部に生じていようと、私は何も見ることがないということになる。見ることを、観念を抱くこと等といった思考の営みから切り離すことは出来ない。それどころか、それはそうした思考の営みそのものですらある。——以上がデカルトの見ることにについての説明である。その銅版画のモデルそれ自体が誤りであるということはない。われわれは、比喩的な意味に於てではなく、文字通りの意味に於て、そこに森や街や嵐を見るときとして良いであろう。しかしその説明は、見ることを他の多くのことであるとするだけで（しかもどれ程多くのことであることか）、少しも見ることの何であるかを明らかにすることが出来ない。

これに比べて第二の人々は極めて禁欲的である。われわれはその代表者として『視覚新論』に於けるバークリーを選ぶことが出来る。バークリーの場合、見ることの説明は次のようなモデルを使ってなされる。われわれは或る音を聞くこと（誰かと会話している場面を考えれば良い）、直ちに或る観念を理解することが出来る（バークリーはその音とその観念との結びつきを習慣によるものと考える）。この場合、われわれは音を聞くのであって、決して観念を聞くのではない。同様にわれわれが見るのは観念ではないのであって、それが何であれとにかく観念とは別の何かである。例えば距離というものを、われわれは直接見るのではない。バークリーによれば、私が或る距離の遠さを見たという場合、それは、私が目を転じることに伴って生じた感覚と、距離の遠さの観念との経験的で習慣的な結びつきによって説明されるのでなければならぬのである。⁽³⁴⁾——バークリーの用いたモデルも、それ自体としては誤ってはいないであろう。確かに、われわれは音（または声）を聞くのであって、そのあらわしている（それと結びついている）観念といったものをではないと考

えられる。しかし、仮にこのことが正しいとしても、モデルの正しさは説明の正しさではない。パークリーに従って、われわれは距離の遠さを見ないとしてみよう。では、一体何を見るのであろうか。「目を転じることに伴って生じた感覚」をであらうか。しかしそれは目の運動感覚でないとしたら他に何であり得るのか。するとわれわれは目の運動感覚を見るのであろうか。同様に、赤（の観念）を見ないとしたら、普通われわれが赤を見るという場合に、本当は何を見るとすれば良いのであろうか。

第一の人々の場合には、見ることは見ることに以外の実に多くのものであるとされるだけで、その何であるかは全く分らないということになった。第二の人々の場合には、それと対照的に、見ることに「目を転じることに伴って生じた感覚」というようなものだけが残されるだけで、実質的にはそれは殆ど何も見ないことであるという結果になった。孰れにせよ、彼らから「見ることは何か」を学び知ることは、到底出来そうにない。

(三—二) ところで、プラトン註釈者達の多くが、とりわけ『テアイテトス』一八四B—一八六Eに於けるプラトンを第二の人々の列に加えようとしていることは、それ程驚くに当らない。⁽³⁶⁾しかしそれは、プラトンのそこでの議論が、見ることについての第二の人々の主張、或はそれに近似的なものを前提にしなければ、理解し得ないものとなるから、またはその「知ることと感覚することとは同じではない」とする論証そのものが成立し得なくなるからではない。むしろ逆に、後に明らかとなるであらうが、そのような主張を前提することによつては、その論証は成立し得ないものとなると同時に、その議論を理解することも出来なくなるのである。註釈者達がプラトンを第二の人々の列に加えようとするのは、彼らがプラトンの議論を、感覚することと判断することの区別に関する議論と誤解するからである。言い換えれば、彼らはプラトンを恰も第一の人々に対して議論しているかのようにみなすからなのである。感覚することが判断することであると主張するのは第一の人々であった。そして、このようにプラトンが第一の人々に対して議論していると解する註釈者達

表現の類比(二)

は、感覺することと判断することの區別が出来さえすれば、感覺することと知ることの區別は直ちになされ得るものと考えらる。彼らによれば、プラトンは、知ることが判断の形式をとるといふことを、少くともここでは前提にしているはずだからである。⁽³⁶⁾

しかし、ここでプラトンは第一の人々に対して、感覺することが判断することであるかどうかを議論しているのではない。もしそのことが問題であるとすれば、ここでプラトンがしなければならぬのは、何かを見ることと、例えばそれを赤と判断することとが違ふという唯それだけのことを言うことであろう。そしてその結果、見ることにについては、第二の人々と同じように、正確には「赤を見る」と言つてはならないのであつて単に「或る何かを見る」とだけ言うべきである、と主張することになるであろう。もしこのようであるとすると、ここでプラトンは殊更「共通のもの」について議論する必要は全くなかつたといふことになるであらうし、「あるといふそのこと」に関する後半の議論は、それにも増して unnecessary であつたといふことになるであらう。⁽³⁷⁾ だが、プラトンを第二の人々の列に加えようとする人々の意に反して、プラトン自身は「赤を見る」といふ言ひ方を否定しようとはしていない。⁽³⁸⁾ では、これによつてプラトンは、第一の人々と同じように、見ることは判断することであると主張していることになるのであらうか。⁽³⁹⁾

しかし、問題は見ることが判断することであるかどうかといふことではない。それといふのも、先に強調して置いたように(二一)、ここでプラトンが議論している相手といふのは、第一の人々でも第二の人々でもなくて、むしろ第三の人々だからである。その第三の人々に対する議論は、既に見たように(二二三)、感覺することが判断することであるかどうかを巡つてなされたものではなかつた。そしてまた、実のところ、プラトンは「赤を見る」といふ言ひ方を否定しないからといって、そのことを~~は~~見て見ることが判断することであると主張していることになるとみなす必要はない。その言ひ方が含意しているのは、取り敢えずは次のことだけであると考えるべきである。即ち、見るとはとにかく或る一定の何かを見ることである。しかもそれは、「單なる何か」としか言ひようのないもの、つまりいつでも不定の何かとしてのみ

あるものだけを見るということではない。われわれはいつでも赤なら赤、立方体なら立方体を見るのであって、赤でもなければ白でもなく、或は立方体でもなければ球でもなく、その他何なるものでもないような単なる何かを見るのではない。単なる何かを見るとするじかないような場合もあるに違いないが、それはそういう場合もあるというだけのことであつて、いつでもそうだとしたことでは決してない。それ故、見るとはとにかく或る一定の何かを見ることである（この場合、単なる何かを見るということも、それはそれで一定の何かを見ることである）。——もしこのことが、既に示唆されたように、見ることについての第一の人々の主張と理解されることも、また第二の人々のそれと理解されることも出来ないとする、われわれには一体どのような可能性が残されているのであろうか。それはどのように理解されるべきであるのか。言い換えれば、『テアイテトス』一八四B—一八六Eに於けるプラトンの感覺することと知ることの區別についての議論は、見ることに於てはそれをどのようなものであるとするのであろうか。

(三十三) その議論に於て、とりわけ見ることは何かに関わる限りのことでプラトンが積極的に主張しているとみなされるべきは、先の「見るとは或る一定の何かを見ることである」ということを除けば、以下の三点である。即ち、(1) 厳密な意味に於て、見えるもの（感覺されるもの）と見えないもの（感覺されないもの）——「共通のもの」の區別があるということ、(2) 見えるものは目（のような感覺）を通して捉えられるが、見えないものは Ψ それ自身を通して捉えられるということ、(3) 見えないものの一つである「あるというそのこと」は、目のような感覺を通しては決して捉えられないものであつて、正にこのことによつて見る（感覺すること）と知ることとは區別されることになるのであるということ、以上の三点である。ところで、今、私が或るものの赤を見ておるとしよう。この場合、われわれは(3)を次のように解すべきであらうか。『つまり(3)によつて言われているのは、単に見ることによつては同じである、かどうか、一つである、かどうか、赤である、かどうかといったことを捉えることが出来ないということである。そしてそれは、単

表現の類比(二)

に見ることによつてはそれをそれとして捉えることが出来ないということなのであるから、当然、「赤を見る」という言い方をしてはならないということになる。逆に、「赤を見る」という言い方を許容し、そのようにして一定の何かを見るのであるということを依然として主張しようとする場合には、(2)に反して見えないはずのもののまで目を通して捉えられるとすることになり、結局のところ(1)の見えるものと見えないものの区別を意味のないものとするようになるのである。——これに対しては、そのように「赤を見る」という言い方を許容したとしても、(3)を次のように解するのであれば、見えるものと見えないものの区別を無意味なものとしなくて済む、とする考え方もあるかも知れない。即ち、

(3)の言っていることは、見ることから「あるということ」を捉えるψの働きを切り離してはならないということであつて、もしψなしでも見ることが出来ると考えた場合には、そしてその場合にのみ、先のように単なる何かを見るとしか考えられなくなるのである。このように主張する人々は、實際プラトンによつて、ψによつて見るということが、前半の議論のはじめのところで強調されていたのではないかと付け加えるかも知れない。しかし、彼らの主張するようにψによつて見るとしたところで、「あるということ」が目を通して捉えることの出来ないものである限りは、少しも事情は変わらないであらう。それとも、「あるということ」は見るることによつても、何らかの仕方では捉えられるとすべきであるのか。そして、「ψによつて見る」は正にそのことを言わんとするものであると考えるべきであるのか。だが、もしそうだとすると、それはやはり見えるものと見えないものの区別を無意味なものとするものでしかあるまい。

然し乍ら、(3)の「あるということ」を捉えることが出来るかどうかというところで問題とされるべきは、それを捉えるならば或る一定の何かを見ることになり、捉えないならば単に不定の何かだけを見ることになるというようなことではない。われわれの先の考察(二十三)は、この場合に問題であるのは、例えば私の見たものが真に赤であるかどうかといったことである、という点を明示していた。「あるということ」を捉えることによって、私は私の見たものが、単に一定の何かであるということだけ、をではなくて、真にそれである、ということと捉えるのである。先の私の例に則して

言へば、私が一方で球に触れたと感じ、他方で立方体を見たとしても、もし Ψ がなければ、つまり Ψ によって触れたり見たりするのではないとした場合には、「それが同じ一つのものであるのかどうか、そしてそれは球であるのか、それとも立方体であるのか」といふことを、私は問題にすることをすら出来ないのだ。そしてまた、先の考察によつて Ψ に依つて Ψ それ自身を通してでなければ、そういったことを捉えることが出来ないということも明らかにされたのであつた。しかし以上のことは、 Ψ なしでは何も見えない、つまり見ることにそれ自身が不可能になるということの意味しないし、それどころか、或る一定の何かを見るということを否定することすら意味しないのである。それによつて言われようとしてゐるのは、要するに、その場合私には、真に球に触れたのかどうか、真に立方体を見たのかどうかといったことを問題にする可能性がどこにも残されてないということであり、私はそういう仕方では球に触れたのであり、立方体を見たのであるという唯それだけのことである。しかもこの場合、単にそれが真に球であるかどうか、立方体であるかどうかが問題になり得ないだけではなくて、球の何であるか、立方体の何であるかということも同じく問題になり得ないのであつた。それ故、これは次のようなことであるとしなければならぬ。即ち、球に触れたという場合、そのものは球であるのでも球でないのでもなく、唯球となるだけである。同様に立方体を見たという場合、そのものは立方体であるのでも立方体でないのでもなく、唯立方体となるだけである。言い換えれば、それが立方体となるという正にそのことが、立方体を見るということなのである。従つて、「或る一定の何かを見る」ということに於て問題なのは、「一定の何かである」ということではなくて、「一定の何かになる」ということなのであり、その生成の説明方式なのである。⁽⁴²⁾

しかし、以上のように解することは、所謂生成 (genesis) と存在 (existence) とに關する二世界論の描きを受け容れようとするものでは決してない。⁽⁴³⁾ われわれが受け容れるべきは、見ることによつては「あるということ」を捉えることが出来ないという唯そのことだけである。しかし、たとえこのことが見えるものと見えないものとの厳密な區別に基づくのであるとしても、だからといって、見えるものについては「あるということ」を捉えることが出来ない、それ故見え

表現の類比(二)

るものについては、厳密な意味での知ることが成立し得ないということになるのではない。むしろ逆にわれわれは、もし知ることがそもそも可能であるとすれば、これまでのわれわれの考察が示す限りでは、つまり知ることの必要条件が問題とされただけで、十分条件については何も問題とされなかったその限りでは、見えるものについても、他のものについてと同じだけ厳密に、知ることが可能であるということを明らかにしなかったであろうか。

ところで或る人々は、立方体や球、或は柔さや固さが、目を通して、或は手を通して捉えられることに、或る疑いを持つかも知れない。何故なら、それらは「イデア(エイダス)」であって、感覚されるものではないとプラトンは語っていたはずだからである。だが、この点については次のことに注意すべきである。即ち、例えば立方体が目を通して捉えられるとしても、それは立方体の「何であるかというそのこと」が目を通して捉えられるということではないのである。もし立方体の何であるかが問題になるとしたら、それもやはり「あるということ」を捉えることが出来るかどうかの問題としてでなければならぬ。それ故、それは見ることや触れることの問題ではなくて、知ることの問題なのである。従って、もし立方体の「イデア(エイダス)」というものがあって、そしてそれが立方体の「何であるかというそのこと」を言うものであるとすれば、それを捉えることが出来るのは、目や手を通してではなくて、やはり又それ自身を通してである。——それにしても、立方体の何であるか、或は立方体が球でないといったことすら、全く問題になり得ないようなところで(感覚することとはそのように規定される以外にないのであった)、それでも猶、見るとは或る一定の何かを見ることがあるとすることに、一体どれ程の意味があるのかと人は問うかも知れない。しかし、もしそのことに意味を見出すことが出来ないのであれば、その人は、否応なく、見ることは単に不定の何かを見ることが出来ないということに同意しなければならぬであろう。それだけではない。その人はまた、「ある」と「なる」とを混同することになるであろう。即ち、「あるということ」の問題及びそのことについての理論と、「生成」の問題及びそれについての説明方式とは、結局は同じものであって良いことになるであろう。何故なら、その人は、「一定の何かである」というこ

とと、「一定の何かになる」ということの間に、何ら違ひを見出すことが出来ないのだからである。

四

「見ることは何か」に関する以上の考察からの帰結は、次の通りである。

(1) 見るとは或る一定の何かを見ることである。しかし、或る一定の何かを見るということに於て問題なのは、或る一定の何かである、かどうかということではなくて、或る一定の何かになる、ということである(見られることによって、或るものが一定の何かになる)。

(2) 見ることそれ自体に於ては、真偽は問題となり得ない。それは、見ることによって「あるということ」を捉えることが出来ないからであり、(1)に関連して言えば、それ故、見ることそれ自体に於ては、或る一定の何かであるかどうかということも問題になり得ないからである。

(3) しかし、(2) は見えるものについては真偽が問題となり得ない、言い換えれば見えるものについては、厳密な意味に於て、知るということが成立し得ないということではない。見えるものについても、もしその「あるということ」を、 Ψ によって Ψ それ自身を通して捉えるのであれば、そしてそれが知ることの唯一の成立条件とされる限りでは、他のものについてと同じだけ厳密な仕方であることが出来るとして良い。

(4) ところで、(1)と(2)は、言わば Ψ を考慮の外に置いた場合の見ることそれ自体に関するわれわれの考察の帰結である。しかし、 Ψ を考慮に入れた場合の見ることにについて、つまり「 Ψ によって見る」ということについては、どのように考えられるべきであるのか。この点に関しては未だ明らかにされていない。——最後にこの点を明らかにすると同時に、それと関連する若干の事柄に言及することにした。

表現の類比(二)

表現の類比(二)

結論から言えば、「 Ψ によって見る」に於ける「 Ψ によって」は、見ることをそれ自体が成立するための条件ではなく、何かそれ以上のことが成立するための、つまり見ることが「表現」であるための条件なのである。見ることそれ自体が成立するために Ψ が必要であるということはない。 Ψ がなくても見ることは可能である。そうでないとすると、見ることが出来るということは、真偽を問題にすることが出来るということになる。それ故、「 Ψ によって」は、少くとも見ることそれ自体ではなくて、何かそれ以上のことの成立するための条件であるとしなければならない。ところで、われわれは「 Ψ によって見る」のでなければ、われわれの見たものが同じ一つのものであるのかどうか、そしてまたそれは何であるのかといったことを、問題にすることすら出来ないものであった。従って、「 Ψ によって見る」に於ける「 Ψ によって」は、見ることに於てそういったことがわれわれにとって問題となるための条件である。われわれは「 Ψ によって」、そういったことがわれわれにとって問題となるような仕方で見ることが出来るようになるのである。私はこのこと、つまり「あるということ」が問題となるような仕方で見るということを、「存在の表現」と規定する。言い換えれば、「 Ψ によって見る」は、見ることが「存在の表現」であるための条件であるということである。しかしこれは、「 Ψ によって見る」のであれば、われわれは見ることによって「あるということ」を捉えることが出来る、とすることではない。「あるということ」が問題になるということ、それを捉えることは、全く別の事柄である。「あるということ」は、たとえ「 Ψ によって見る」のであっても、やはり見ることは出来ないものであって、それは Ψ それ自身を通して捉えることが出来るだけなのである。しかし、われわれは、「 Ψ によって見る」のであれば、見ることに於て「あるということ」を問題にすることが出来る。実際そうでなければ、われわれはもっと良く見ようとしたり、もう一度見直そうとしたりすることは決してないであろう。ところで、「あるということ」が問題になるとは、結局のところ真偽が問題となるということであった。それ故、私が「表現」と呼ぶのは、それについて真偽を問題にすることが出来るようなそういうものことである。「 Ψ によって見る」は、その意味に於て、つまりそれが真であろうと偽であろうとどちらかを

表現する（それが「あるということ」を表現するということである）という意味に於て、「存在の表現」である。そして、その真偽の決定ということ、言い換えれば「あるということ」を捉えるということは、正に知ること⁽⁴⁾に於てなされるのであつた。

以上の「 Ψ によって見る」についての考察は、それが「存在の表現」という点で話すことと類比的であることを明らかにしている。「 Ψ によって見る」は「言葉」と類比的である。両者は共に、各々の仕方（この点だけかどうかは別として、少くともこの点に両者の違いがある）「あるということ」を表現する。これによってわれわれは、「表現について一般的な理論」のための重要な手掛かりを得たことになるであらう。

註

(1) 本論は、先の拙論「表現の類比(一)」——プラトンに於ける「他」をめぐって（『ソピステス』二五九D—二六四B）（熊本大学文学会『文学部論叢』第二号昭和五十五年）に続くものである。全体は「表現についての一般的な理論」を目指す（但し、先の拙論は「言葉」についての、そして本論は「見ること」についての、各々互いに独立した考察から成る）が、その「理論」そのもののについては、その可能性がこの第二部の末尾に於て示唆されるに止まる。当の「理論」の十全な構成は別の機会に譲らねばならない。

(2) 「観念を抱くこと等」は、『屈折光学』に於けるデカルトの、見ること（感覚すること）についての規定である。それ故、私は「第一の人々」を Cartesian とみなす。これについては、更に三一—参照。

猶、私はここでは「感覚 (sensation)」と「知覚 (perception)」との区別については、一切無関心である。もしそうした区別がなければならぬとしたら、以後の、見ることに於けるわれわれの考察がそれを明らかにするであらう。三一—及び四参照。

(3) 私は「第二の人々」を Berkeley とみなす。これについても三一—参照。

(4) 「第三の人々」は、正確には、プラトン『テアイテトス』に於けるテアイテトスの、「感覚することと知ることとは同じである」という主張（一一一E）をなす人々である。プロタゴラス主義者とヘラクレイトス主義者とは、各々の仕方⁽⁵⁾でこれと同じことを主張する人々である（前者については一一一E—一二二A、後者については一二二D—E参照）。それ故、三者の關係は次の通りである。即ち、テアイテトス説はプロタゴラス説、或はヘラクレイトス説のどちらか、或はその両方を自らの根拠とすることが出来る（だが、それは不可能であることが後に示される）。また、独自の仕方⁽⁶⁾で自説を根拠付けるのであつても良い（しかし、それは結局のところ『テアイテトス』のどこに於ても示されない、というよりはむしろ、その不可能であることが最終的

表現の類比(二)

に明らかにされる。

- (5) 『テアイテトス』のこの箇所の議論が第三の人々(感覚することと知ることとは同じであると主張する人々)に対する議論である、ということに注意しなければならない。この箇所についての註釈者の大部分は、それを第一の人々に対する議論であると誤解して、ここでプラトンは、何よりも先ず、感覚することと判断することの区別を論じている、そしてその上で、それ故(つまり、感覚することは判断することではないから)感覚することは知ることではないと結論付けている、というように理解しようとする。従って、彼らによれば、見ることに付いてのプラトンの考え方は、第一の人々に対する第二の人々のそれと同じであるということになる。しかし、プラトンはそのように論じているのではない。これについては三二参照。

- (6) 以上、所謂 self-refutation の議論(二六九D—二七二D)の一部を再構成したものである。この再構成については M. F. Burnyeat, "Protagoras and Self-refutation in Plato's Theaetetus", *Philosophical Review*, 1976, pp. 180-182 参照。しかし、以上のような再構成が果して正当であるのかどうか、更には、プロタゴラス説が、こうした self-refutation の議論によって決定的に論駁されるものであるのかどうかというところですら、後に述べる理由から、われわれにとっては問題ではない。註(7)参照。

- (7) 以上のような論駁を通しては、原理的に、同じでないということが、何らか部分的にですら帰結することはあり得ない、ということに注意すべきである。プラトンは一八四B—一八六E以前のどこに於ても、感覚することと知ることが同じでないということを、少しも論証しようとはしていない。それ以前の議論はすべて、プロタゴラス説によってもヘラクレイトス説によっても、感覚することと知ることとは同じであるというテアイテトスの主張が根拠付けられ得ないということについての議論である。

これに対しては、一七七C—一七九Bの「未来に関する議論」をその反証として持ち出そうとする人々があるかも知れない。——例えば J. McDowell, *Plato Theaetetus*, Oxford, 1973, p. 179 参照。しかしその議論の帰結は、未来に関しては誰もが Measure するのではない、と云々云々ではない。そしてこれは、先の self-refutation の議論の帰結(すべての人にとって「そう思う」ことが「そうである」ことの必要十分条件ではない)と同じである。即ち、プロタゴラス説に対する反駁を意味するだけである。

- (8) 「表現の類比」ということで私が問題にしたいのは、専らこのことである。しかしこのことに関して得られる收穫は、恐らくほんの僅かのことであろう。だからといって、それは決して小さなことではない。

- (9) このように分けることの理由については、以下の考察がそれを明らかにするであろう。

- (10) 「によって」は「を」を通じて(この対照については一八四C及び二二二参照)。しかし、ここでは「同じものによって」と「別々のものによって」との対照の方が問題である。

ところで、この「同じもの」が何であるかについては、ここでは問う必要がない。それが「同じもの」であるかどうかだけが問題だからである。それを *αὐτὰ* と呼ぶことに對するソクラテスの「逡巡」(一八四D)はこのことを示すものである。——また、(その同じ箇所)に於て、この「同じもの」Kについては「すべての感覚(*αἰσθησις*)」がそれに向う(*ἐννοεῖται*)、或る「つの

イデア (*idea* τῆς *idea*)」とも言われている。このことが何を意味するかは、われわれの二—一の考察によって明らかに becoming である。

- (11) 「別々のものによつて」とした場合について、プラトンは「トロイの木馬の比喩」をそれに当てる (一八四四)。これがどのような場合であるかはつては註(13)参照。

- (12) この例が形の例であることに對して、次のような人ははじめから異を唱えるであろう。即ち A. J. Holland ("An Argument in Plato's Theaetetus: 184-6", *Philosophical Quarterly*, 1973, p. 102) の言ふ「プラトンは the proper object doctrine of perception を主張する」という doctrine is... asserted in its strongest form... that any object of sense-perception is private to just one sense とする人である。更に「このやうな人は、その解するのだからいふにプラトンの議論は理解出来なかつた主張であるかも知れない。——しかしこの点については All the argument actually uses is a weaker principle とする Burnyeat ("Plato on the Grammar of Perceiving", *Classical Quarterly*, 1976, p. 48) の見方が正しい。詳しくは二—二参照。

- (13) 「同じものによつて」に對する「別々のものによつて」を、私は以上のように解する。しかし、それはヘラクレス的な生成流転の世界に對應するものではない。ヘラクレス的な世界に於ては、「球に触れる」とか「立方体を見る」といった言い方それ自体が(それどころか、単に「触れる」とか「見る」と言うことである)無意味である。この点については、更に三—三参照。
- (14) Burnyeat (op. cit., p. 46) は「プラトンの前半の議論のなから、the conception of a unified perceiving consciousness を確立することにあるとする。そして「何によつて」の問は the subject of perception を問ふのと考える。しかし、ここでプラトンが問題にしてゐるのは、最初から最後まで、subject の問題(誰か、或は何か見るのか)ではない。實際、仮に the unity of the perceiving consciousness が私に与えられたとしても、単にそれだけでは、私は未だ「立方体を見る」とことが出来るようにはならぬ。即ち「或一定の何かを見る」ことが出来るようにはならぬのである。そしてその場合には、それは見ることはなかつた、とすべきである(この点については M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Paris, 1964, p. 182 及び三—三参照)。

- これに對して ψ ($\psi\psi\chi$) が主語となる言ひ方 — $\alpha\psi\chi$ η $\psi\psi\chi$ $\epsilon\tau\iota\alpha\kappa\alpha\tau\epsilon\lambda\epsilon\iota$ (一八五五) $\alpha\psi\chi$ η $\psi\psi\chi$ $\kappa\alpha\theta'\alpha\iota\tau\eta$ $\epsilon\pi\alpha\gamma\epsilon\gamma\epsilon\tau\alpha\iota$ (一八六 A) (η $\psi\psi\chi$) $\sigma\kappa\alpha\tau\epsilon\sigma\tau\epsilon\lambda\epsilon\iota$ $\delta\upsilon\alpha\lambda\alpha\sigma\tau\epsilon\sigma\mu\epsilon\eta$ (同) η $\psi\psi\chi$ $\epsilon\pi\alpha\upsilon\sigma\iota\sigma\tau\epsilon\alpha$ $\kappa\alpha\iota$ $\sigma\upsilon\mu\beta\lambda\lambda\alpha\sigma\iota\sigma\tau\epsilon\alpha$ $\kappa\eta\iota\sigma\tau\epsilon\iota$ (一八六 B) 等——が何を意味するかについては詳(17)参照。

- (15) ここでのプラトンの「ある」の用法については二—三、とりわけ註(28)参照。それは、厳密な意味での「知ること」と、極めて相關的な用法であると考えられる。それ故 C. H. Kahn ("The Greek Verb 'To Be' and the Concept of Being", in *Foundation of Language* 2, 1966, pp. 249-255) は從つて ψ や $\psi\chi$ を *veridical* と規定するよりは誤差を犯さぬ。しかし、唯単にそれだけのものではな。

- (16) このことは「見ることは何か」についての考察にとつて重要である。 ψ は見ることをそれ自体が成立するための原理ではなくて、われわれにとつての見る、ことが成立するための原理である。この点について詳しくは三—三参照。

表現の類比(二)

表現の類比 (二)

- (17) 「 Ψ によって」が何を意味するかについて、誤解を恐れず、より端的な仕方で言うるとすれば、次の通りである。——例えば、私が見たそれが立方体なら立方体であるのは、 Ψ によってである。この意味に於て、 Ψ は「あるということ」の原理である。ところで、その「あるということ」を Ψ が捉える、或は調べるとされること——このことについては註(11)参照——に驚いてはならない。それを捉えたり調べたりする権威を有するのは、原理的に、私やわれわれのうちの誰かではあり得ない。何故なら、それを捉えるということは、必然的に真を捉えるということだからである。それ故、 Ψ それ自身を除いては、そうした権威を有するものはあり得ないのである。
- (18) 「 Ψ によって」に対して「 Ψ を通して」が何を意味するかについては以下の二——二に於ける考察を参照。但し、この対照が何らか文法上の主張を含み、その Burnyeat (op. cit., p. 29) の *our task is to find an interpretation of Plato's grammatical claim that will suit his philosophical purposes* という点ともしも、重要なのは両者の文法上の違いではなくて、各々に於て問われている事柄そのものの違いである。
- (19) 前者の唯一の規定は「共通の」ということである。それは、互いに相異なる感覚を通してのみ捉えられるもの（相異なる個々の或る感覚的性質の如き）に、共通の、というのである。
- (20) 後者については、各々の感覚を通して捉えられるものは各々の感覚に固有のものだけである、とする必要はないということに注意しなければならない。ここで必要なのは、Burnyeat の主張する a weaker principle である——註(12)参照。この principle からすれば、「形（個々の或る形）」が見えるものであると同時に触れられるものであるというところに何ら問題はない。「共通のもの」は、決して「二つの相異なる感覚を通して捉えられるもの」ではないのである。
- (21) 「それらについてそれらに共通のことを考える」とは、例えば相異なる感覚（目と耳）を通して捉えられた相異なるもの、この或る色（この赤）とこの或る音（このB音）、についてそれらに共通したところ（美しいというところ）を考えるというのである。そして、「共通のもの」は「何を通して調べられるのか」という問いは、例えば美しいということが、今考えられたということ自体は別として、原理的に或る感覚を通して調べることの出来るものであるのかどうか、もし出来ないとすればそれ以外の一体何を通して調べられるのかを問うものである。
- (22) この点については Holland (op. cit., p. 106) の an appeal to experience is quite inappropriate at this stage という指摘が正しい。それ故、例えば Burnyeat (op. cit., p. 49) の *we have no organ or sense can be pointed out as the means of access to common features like being, identity...* *there is no such thing as an impression of being or sameness...* などの等々は、その意味が全く「何故か」と問われなければならない事柄なのである。それを理由にして being 等が感覚され得ないことは出来ないのである。——この事情は「白くて透明なものは何故ならか」という問いに対する場合と良く似ている。この場合も、経験上そうであるものはないからであることは出来ない (L. Wittgenstein, Remarks on Colour, Berkeley, 1977, pp. 6-7 参照)。
- (23) これは、われわれが「或るものについて共通のものを感覚する」ことがないということであって、「或るものについて或るこ

表現の類比 (二)

judgement involving predication, and with it an explicit or implicit use of the verb 'to be' という指摘は明瞭でない。例へば *Θεωρητος καθ'ηται* は「真なる判断」であるという。この場合には「ある」を捉えるのか。——この「ある」は「捉える」という正しく *καθ'ηται* を捉えるということなるものならぬ。「ある」となればならぬ（それ故、少くともそれは veridical である）。このように「ある」の用法の詳細については前掲拙論二五—三二頁参照。

- (29) 以上は、要するに、知るという及び「真の」とを捉えることが「ある」といふの「と」を捉えることを必要条件とする、といふことである。故に P. N. White (Plato on Knowledge and Reality, Indianapolis, 1976, pp. 185-186) の主張する (Plato) only commits himself to saying that knowledge can deal with "being", not that it always does so ということが正しい。

- (30) 註釈者達は、プラトンの最後の論証を次のようにする。即ち、知ることは判断するのを必要條件とする。然るに、感覚はそれ自身判断する能力を持たない——この点では Burnyeat² (op. cit., p. 45) が The inability of perception to grasp being stems from an inability to frame even the simplest proposition of the form 'x is F'... that perception is not capable of any such judgement である。それ故、知るという感覚する能力は無い。

「この」能力は「知る」とか「知る」とか或は感覚するものが判断の形式を、或は proposition の形式をとるかどうかといったことを論じようとするのではなく。この問題なのは、言わば「これは立方体である」の「ある」を捉えることが出来るかどうか、ということだけである。

- (31) 「ファイテス」に於けるプラトンのこれ以後の議論については、私はそれを知るための十分条件の探究と解する。言い換えれば、それは「ある」といふの「と」を捉えるというものが一体何によって成立するのか、という問題を巡ってなされる探究である。

- (32) Descartes, La Dioptrique, dans Œuvres de Descartes, publiées par Adam et Tannery, Paris, 1897-1913, Vol. VI, pp. 113-114 及び Merleau-Ponty, L'Œil et l'Esprit, Paris, 1964, pp. 36-41 参照。

- (33) Descartes, op. cit., pp. 130-131 参照。

- (34) Berkeley, Essay towards a new Theory of Vision, in The Works of George Berkeley Bishop of Cloyne, edited by Luce and Jessop, London, 1948, Vol. I, pp. 171-174 参照（ベーンリーの命令、但し感覚の諸面への認識の場合に同様に適用される）。

- (35) 同様に Cornford, op. cit., p. 105 及び I. M. Crombie, An Examination of Plato's Doctrines, Vol. II, Plato on Knowledge and Reality, London, 1963, p. 14 参照。

亦た「プラトンを第一の人の列に加える」といふことに関し Burnyeat² (op. cit., pp. 49-50) は特に明瞭である。彼は if all judgemental factors are abstracted from it (perception)... What remains... is a transaction of a determinate kind between the perceiver and certain items 'out there'... といふ。この「と」は、彼が it is a question whether the transaction could be characterized in sufficient detail to be recognized as perception without bringing in some

trace of awareness, consciousness or judgement... ところが疑問を付け加えねを得ない。

- (36) 彼は故に McDowell (op. cit., p. 193) のためにプラトンは Forms に付して knowledge by acquaintance (non-discursive contemplation of Forms) を主張していることを認める人々に付して、このプラトンは Forms に付しては全く度外視して、(37) プラトンは knowledge 一般について論じているのではなく、knowledge of what one perceives についてだけ論じているのである。か、またはプラトンは考え方を變えたのであるか、そのどちらかであるということになる。しかし、われわれの以下の考察は、このような二者択一に自らを追いつ込む必要が全くないことを明らかにするであろう。

- (37) J. M. Cooper ("Plato on Sense-Perception and Knowledge" (Theaetetus 184-186)", *Phronesis* 15, 1970, pp. 130-131) はプラトンの sense-perception に付して「通ひの解釈を提出しているが、それによって、タリ一統の immediate sensory awareness, which does not involve any application of concepts to the data of sense」云々の語句がある。——他が「この語句には註 (85) 参照。しかし彼は、この解釈によれば、the concept red と the koina 及び the concept existence (と彼は *obolai* を解する) とはすべて同等の取り扱いを受けるべきものとなる点に、正しく注意を促している。

- (38) とりわけ一八六〇を見よ。固いものの固さ、柔いものの柔さ等は感覚 (触覚) を通じて感覚されるのである。
- (39) 感覚することは判断するに付するものである。解の一例として Cooper (op. cit., p. 130) の語句「この解釈がある。即ち sensory awareness puts the restricted use of concepts which is involved in labelling the colors, sounds, etc., presented in sensation with their names——或は sensory awareness plus the supposedly immediate classification of its objects (op. cit., p. 141)——」云々の語句がある。

だが、このような解釈は、たとえそれに perception does not go beyond subjective reports of concept of sensory experience ということを付け加えたとしても、感覚能力は人間にも動物にも生まれつき備わっている (一八六〇) として、これについてはどうのように説明するか。

- (40) つまり、「或る一定の何かである」に於ける「ある」も、やはり世によって世それ自身を通してでなければ捉えることの出来ないものである。しかしこのことは、直ちに「或る一定の何かを見る」ということと矛盾するものではない。これについては三三参照。

- (41) 「單に一定の何かであるということだけではなくて」とは、正確には、前註 (40) で述べた「或る一定の何かである」に於ける「ある」が捉えられるためにも、即ち「それは F である」に於ける F の何であるかというそのことが決定されるためにも、言い換へれば McDowell の言ひ「F に付しての identification」——註 (28) 参照——が成立するためにも「あるというそのこと」が世によつて世それ自身を通して捉えられねばならぬというに付する。猶 McDowell は單なる identification と區別して、それによつての knowlegeable identification (例へば a proper knowledge of what hardness is) を別に立てる (op. cit., p. 192) が、私はこの區別に意味を見出せぬ。——以上に於て注意されるべきは、プラトンの場合、*obolai* を捉えるかどうかという問題は、同時に二つの問題に関わっているということである。即ち、「真理の問題」と「意味の問題」とである。しかも、これら二つは切り離して取り扱われてはならないのであって、むしろ「真理についての理論」が「意味についての

表現の類比 (二)

理論」でもあると、或は前者が後者を提供するといった仕方では考えられないのである。この点については、更に前掲拙論二十五—三十二頁参照。従って、ここでのプラトンの *obscia* を「或る一定の何かである」の「ある」とだけ解する人々は、事柄の半分以下しか見ることの出来ない人々なのである。

(42) ところで、仮に「Fを見る」の説明方式がSであるとして、そのSによっては或るものがFであるかどうか、Fの何であるかな等は説明され得ないということに注意しなければならない。Sであるということは、直ちにFであるということではないのである。——これについては、更に註(46)参照。

(43) *révérenc* と *obscia* を厳密に区別すること、二世界論の描きを受け容れることは全く別の問題である。——ここでプラトンは Cornford (op. cit., p. 108) の主張するやうに、*obscia* と *évidencia* とは Forms につづてのみ認められるべきであって、sensible objects に対しては否定されるべきであるなど論じてはいる。しかしそれが否定されないということは、*obscia* と *révérenc* の区別が曖昧になるやうなことはなから。逆に言えば、G. E. L. Owen ("The Place of the Timaeus in Plato's Dialogues", Classical Quarterly, 1953, pp. 85-86) の主張するやうに、ここでプラトンは見えるものにも *obscia* を認めようとするのであるが、そのことは、Owen の主張に反して、『ティマイオス』に於ける *révérenc* と *obscia* の厳密な区別と何ら矛盾するものではないのである。

(44) これにつづいて、例えば N. Gully, Plato's Theory of Knowledge, London, 1962, p. 91 及び McDowell, op. cit., p. 189 参照。

(45) われわれが認めるべきは、立方体を見るということは立方体の「イデア (エイダス)」を見ることではないという唯それだけのことである。——他方、見えないもの(「共通のもの」)が「イデア (エイダス)」であるかどうかについては、殊更ここで問題にする必要はないであろう。しかし私は、ここでの感覚することと知ること、及び見えるものと見えないものの区別についてのプラトンの議論が、「パイドン」や「国家」に於ける the theory of Forms と根本的に矛盾するとは考えない。だが、この点に関して議論することは私の関心の外にあることである。

(46) 「あるということ」の問題及びそのことについての理論と「生成」の問題及びそれについての説明方式とは、厳密に区別されねばならぬ。「生成」についての説明方式がより精密化されることによって「あるということ」についての理論(それは「真理」についての理論)であると同時に「意味」についての理論(でもある)に取って代わるなどということは起り得ない。色覚についての光学的—生理学的説明がどれ程精緻になろうとも、今私の見ているこの色(私の目の前には一冊の本の色)が何色であるかを予想し決定することは出来ない——この点に関し、E. H. Land ("The Retnetz", American Scientist 52, 1964, pp. 247-264) の提唱した十分に知的な理論は興味深い。

(47) 見ることをそれ自体とわれわれにとっての見ることは区別されるべきである。われわれは「Fによって見る」のである。しかしこのことは、何度も言うやうに、「Fによつて」でなければ見ることが出来ないということでは決してない。

(48) 「存在の表現 (*obscia* *évidencia*)」ということについては、更に前掲拙論十四—十六頁参照。

(49) これにつづいては註(一)参照。

稿 本論の草稿ないしその要旨は、熊本大学をはじめとして二、三の大学で読まれた。各々の機会に本論を通る講演に参加して、多くの有益な示唆を与えてくれた諸先生、同僚、友人、学生諸君に感謝すると同時に、本論がその示唆に十分応え得ていないであろうことを御詫びしたい。

表現の類比(二)